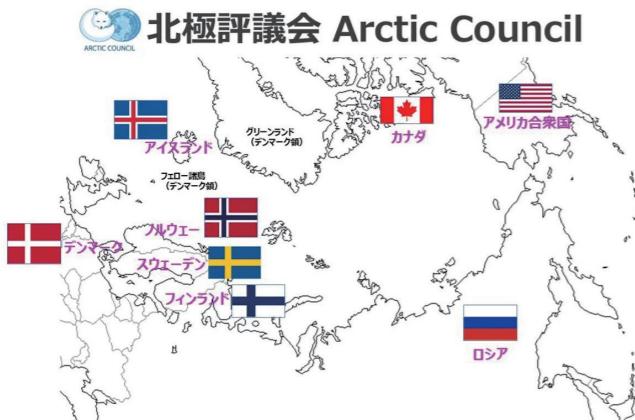


私たちに満ちる大自然の力を育もう



サウンドヒーリング協会 理事長
喜田圭一郎

地球の生命進化の最後に誕生した私たち人類はその歴史の中で戦争につぐ戦争を繰り返し、今も世界の各所で戦争が起きている。人間はなぜ戦争をするのだろうか。自国の領土を拡げる為？自国への侵略を防ぎ國を守る為？攻撃を手段として戦争を起こす？恐怖心が戦争を起こす？地下資源？どのような理由であれ国民を死に追いやつても、戦争の意味は本当にあるのだろうか。どんなに戦争反対と叫んでも、戦争を起こす人間の心の奥深くにある、その「原因」を取り除き、心の底から平和な精神を誰もがつくり上げない限り、人類の歴史から戦争が無くなることはないだろう。

近い将来、地球上で最もホットな場所になるのが北極圏と宇宙空間ではないだろうか。米国のトランプ大統領のグリーンランドに関する発言から世界の目が向けられている北極圏では、自国にも北極圏の一部に権利があると主張している国が8つある。その8か国は北極評議会を構成し協議を続けようとしている、日本はオブザーバー13か国のひとつとして参加が認められている。地球温暖化の影響で北極圏は船の航行が容易になりつつあり、地下には途方もない量の天然ガスと石油があると考えられている。経済発展を基軸にする地下資源の開発は地球の環境汚染を更に進める可能性がある。宇宙軍と聞くとアニメを連想しそうだが、米国、ロシア、中国、イスラエル、フランス等には宇宙軍があり、各国は宇宙の軍事利用を進めている。日本は航空自衛隊の中に宇宙作戦群がある。宇宙時代の幕開けかも知れないが、人間の心が地上での権利を力で奪うような精神のあり方では、新たに大きな問題を生む可能性がある。

私たちが生まれた星、地球は24時間で自転を繰り返し、太陽の周りを1年かけて公転している。そのお蔭で地球には朝と夜があり、日本などには季節の変化もある。地球から最も近い天体、月は自転も公転も約27日の周期で動き、同じ側の顔を私たちに見せてくれている。月の公転により満月と新月があり、歴が生まれ、夜空に変化をもたらしている。そして月と太陽の引力の影響を受けて地球が自転することで干潮と満潮(1日2回)があり、内海と大海の潮の流れにも変化がある。天体が動き、宇宙が動くことで、それぞれの周期があり、時間や暦があり太古の昔から、人はこの天体の影響下にあった。現代に生きる我々も、時間は時計のことではなく、天体の動きとその周期を基にして生まれたサイクルであることを忘れてはならない。もし地球の自転周期が25時間になれば一日が長くなり、一年も変わらんだろう。ちなみに地球に近い金星の公転周期は約225日、自転周期は約243日と自転周期のほうが長く、太陽は西から昇り、東に沈む。



マウナケアの空



ストックホルムの夜明け

地球の大きさを直径約12センチに縮尺すると、足元の大地はたった1ミリ程度の厚さのプレートであり、地球は約10数枚のプレートで覆われている。そのプレートは地球内部のマントル対流の影響で止まることなく動き、日本はプレートが4つ重なり地震が多発する。私たちの心は安定を求めるが、自然も宇宙も止まることなく常に動いているのである。体の中も、静かに休息し眠っていても、血液は動き、循環し、細胞も一定の周期で生まれ

変わる。また動きがあることで栄養を運び、老廃物を排出している。地球の命を生み出した水も、おいしい生きた水は、流れがあり動きのある水であり、水は同じところにとどまると腐敗してしまう。心も固執し執着するより、いつも「さらさら」としていた方が体にはよい。音の振動は縦の波で振動し、物理的に水をこまやかに動かし刺激し、水分子の溶解力を高めることが実験により確かめられている。また音の振動を体に当てるときがほぐれて固執していた思いを手放しやすくなり、心が軽くなる。

古代より音の癒しは宇宙に満ちる秩序と調和の力を、高い精神性を持った人を通して、縦に下して地上とつなぎ、音の響きに封じ込めることが基本とされている。音を扱う人は宇宙に満ちる秩序と調和の法則を知り、それを生かす「心を培う」ことが求められるのである。

地球や月の自転と公転、また太陽系の銀河系内の動き。心臓が自分の意思では止めることも動かすこともできないのに、動き続けている力、そして代謝が生まれる力。自分の中にあるその力は何か、その源はどこにあるのだろう。動いていることは知っていても、何故動いているのか、その源の「生命の力」が何なのか、私たち人間の目には見えないためか、まだ十分に解明できていない。大きな天体が一定の周期をもって、互いに衝突することなく、秩序をもって動く源の力は何だろう、なぜ動いているのだろうか。地球の常識では自発的に成長し動くものは、微生物や植物、動物など生命の宿るものである。そう考えると宇宙で動き続ける地球や太陽、星々は何か大きな生命の源から生まれているのだろうか？夜空に輝く美しい星々、もしかして生命体としての心があるのだろうか？

そんなことを考えながら私たち太陽系の天の川銀河内の場所と動きを調べていると、地球から見える美しい星々(プレアデス444光年、アルデバラン666光年、北極星433光年、等々)はかなり近いご近所の星々のようだ。銀河系の大きさは直径10万光年もあり、その中に恒星は3千億個以上も存在しているという。太陽系は天の川銀河の中心から約2万7千光年離れた郊外のような位置にあり、一般的な望遠鏡では地球から約3千光年の位置にある星までしか見ることができない。さらに向こうの星は恒星やガスが先を覆い隠してしまう。



プレアデス

私たちの地球は銀河系の真ん中にあるブラックホールを中心としてその周りを太陽系の惑星と共に太陽の周りを公転しながら、銀河系の中を約2億5千万年かけて一周しているという。自転軸が傾いた地球が太陽の周りを公転することで1年には季節の変化がある。冬は寒く、体は締まり、夏は暑く体は汗をかき老廃物を排出しやすくなる。北半球の夏は地球が銀河の中心に近い位置を公転し、夜には銀河の中心方向を見ているお陰で、空には星々の多い銀河の中心が明るくよく見える。しかし冬は地球の位置は銀河の中心から遠い場所を公転し、星々の少ない銀河の外側を見ているので天の川は夏のようには明るく見えない。

地球の公転運動により季節の変化があり、その周期で次の新年があるように、太陽系自身が銀河系内を公転する周期があるということは、さらに大きな周期が宇宙にあり、今はその一つの周期が終わり、次の新しい周期が始まるときなのだから